かいま見とゆかり

――源氏物語の一視点――

橋本昌代

1

かいま見は古代的な物語の方法として常套的であるといわれている。たとえば、『源氏物語』の中でも、光源氏が北山で若紫を発見したとき、

あはれなる人を見つるかな、かゝれば、此（の）すきものどもは、かゝる、ありきをのみして、よく、さるまじき人をも見つくるなりけり。

と述べているように、物語的世界の日常において、男が女をかいま見によって発見するということは、それほど珍しいことではなかった。むしろ一つの物語を形成するにあたって、かいま見が主要な話素として用いられている場合が少なくないのである。それは、当時の風俗・習慣などからみて、女が男にとって隠された存在であった故に、男と女の出会いが、かいま見を契機とし、あるいはそれを媒介として必然化されるからであろう。物語においてはさらに一種の禁忌性を孕みながら女がかいま見されるということになるのであるが、そのようなかいま見の構造はどうしてもたらされたのであろうか。かいま見は物語にとって、単なる社会的背景の問題にとどまらず、より本質的な問題ではなかったかと思われるのである。

物語の中では、かいま見によって多くの場合、いわゆる「色好みの物語」が始められていくが、このようなかいま見のあり方は、きわめて平安朝的であると思われる。しかしながら、物語において数多く描かれているということと、それが歴史的社会的事実であるということとは、おのずと別問題であろう。女たちは、父親や夫によってうす暗い寝殿の奥深くで養われ、他の男たちからは隔絶された存在である。果たして実際に、かいま見は男と女の出会いとしてあ

りえたのであろうか。また、「端近」であることの罪が物語の中でしばしば言われるが、なぜ男によって顔を見られることがいけないのか。物語の女たちにとってのかいま見における本質的な禁忌とは一体何であったのだろうか。かいま見とはむしろ伝承として語られていく中で真実性の獲得される、きわめて伝承的な存在ではなかったのか。とすれば、本来的なかいま見とは一体どのようなものであるのか。

『源氏物語』の中にも、かいま見の場面は多く描かれている。それらについてはこれまでに、小説構成上の一手法として捉えた今井源衛氏や、見る主体と見られる客体とのかかわりの変化において論じた篠原義彦氏、さらには、一つの文芸としての成立過程を考察した林田孝和氏の論稿など、主に文学史的な流れの中での意義づけがなされている。[1] それらの中には、若紫巻のかいま見のように、物語の展開の上で、重要な役割を果たしているものも少なくないが、すべてのものを同じ「かいま見」として一様に扱いうるものだろうか。

かいま見が成立するためには、いうまでもなく、見る主体と見られる客体の存在が必須の条件である。そして、見る主体（体現者）の立場によって、かいま見自体の物語における意味も、描写のされ方や展開の仕方も変わってくるのである。たとえば、『古事記』の天之日矛の伝承の中のかいま見や、『源氏物語』の中では、若菜巻（これをかいま見と考えるかどうかということもかかわるが）や竹河巻のかいま見を考えてみればわかるように、体現者が主人公であるかないかだけでも物語における意味が大きく違ってくる。さらに、視点のおき方によって、草子地の問題なども絡んでくるが、ここでは、これらのことも念頭におきながら、『源氏物語』のかいま見の中でも、とりわけ「ゆかり」とかかわって描かれるものについて考えてみたいと思う。

「ゆかり」は改めて述べるまでもなく、『源氏物語』の重要な主題の一つである。それ故に、ゆかりである人物の物語内部への登場には、作者の相当な配慮がなされていると考えられる。すなわち藤壺のゆかりである紫上、そして宇治の大君・中君・浮舟などの登場に際してである。それらの人物たちの物語への登場の仕方を考えてみるとき、そこには一つの共通点が見出だせる。それは一体何であるのか。それは、その女たちが男主人公のかいま見を通して登場させられるという点である。では、なぜ「ゆかり」はかいま見によって発見されるのであろうか。そして、それには一体どのような意味があるのであろうか。そこには偶然とはいえない何かが存在していると考えられる。『源氏物語』の方法として、かいま見とゆかりのかかわりについて考察する必要があるのではなかろうか。

2

まず、かいま見とは一体何であろうか。あるいは、単なる「見ること」とどのように違うのであろうか。それについて『伊勢物語直解』は、次のように説明している。

源氏物語におほきことば也　日本紀より出たる　垣間見書也　かきのひまよりのそきみる心なり　これはのそくとは見るへからず物ごしなとほのかに見たる心なり

ここにも述べられているように、「かいまみ」という語は、古くは『記紀』の中に見出だせる。『記紀』ともに、トヨタマヒメのウガヤフキアヘズノ命の出産にまつわるものである。そのときの「かいまみ」には、「見るな」という禁忌がついており、それが破られたことによって、トヨタマヒメは本国へ帰ってしまう。ここでは、「竊伺」「視其私屏」という字をカイマミと訓ませている。字義からもわかるように、「かいまみ」とは、相手に気づかれないように、こっそりとのぞくことである。

それ故に、見る主体と見られる客体の間が「あらは」でないことも、かいま見の一つの条件であると考えられる。たとえば、

日も、いと長きに、つれ〴〵なれば、夕暮のいたう霞みたるに紛れて、かの小柴垣のもとにたち出で給ふ。　（若紫）

あなたに通ふべかめる透垣の戸を、すこし押しあけて、見給へば、月、をかしきほどに霧りわたれるを、ながめて、簾垂をみじかく巻きあげて、人々居たり。　（橋姫）

などの描写にみられる霞や霧などには、もちろん物語的な情趣を醸しだすためということもあろうが、それ以上に、主体と客体の間を隠すためという理由が含まれているように思える。つまり、主体と客体の間が「あらは」であれば、かいま見という、秘かにのぞく主体の意志的行為が成立したことにはならない。また、これは禁忌の存在ともかかわるが、「あらは」でない故に、客体に「見られている」という意識が欠如し、正体（美醜にかかわらず）をあらわしているところを見られてしまうというのでなければならない。そして、こうしたかいま見の「見」について、「見ること」の呪的な意味のあることも指摘されている。

民俗信仰上〈かいまみ〉〈隙見〉の如きは、対手の正体を見破る呪法の一つであり、見破られる者にとってはその神性または呪力

の喪失となる。[2]

その結果、異類であることを見あらわされるために別れがもたらされる場合と、婚姻関係が結ばれる場合と、主に二つの場合が考えられる。「見られること」によって婚姻がなされるのは、「見ること」が領有することにつながるからである。従って、女を獲得することが成功する物語の中には、必ずかいま見が必要とされるといえよう。その意味からも、光源氏の失敗である末摘花の物語について、はじまりの部分にかいま見が欠けており、「立ち聞き」だけが前面に出ているという指摘[3]があるのは首肯できる。

以上のような、主体の意志的な「のぞく」という行為によって、客体の本性をみるというのを基本的なかいま見と考えて、物語におけるかいま見について論じてみたいと思う。当然のことではあるが、「かいま見」ということばが使われていない場合でも、状況的にそのように判断できるものは含めて考えていく。

まず、物語のかいま見の原型として、神話におけるかいま見が考えられる。さきほど述べたトヨタマヒメの場合と、それに類似した黄泉国でのイザナミノ命の場合などがまずあげられよう。この型のものは民話の中にも多くみられ、魚女房、蛤女房など異類との婚姻が語られるものである。前記の二つの神話の伝承についても次田真幸氏は「異族婚姻制にもとづく葛藤や争闘が説話化されたものとみることができる。」[4]と述べておられる。そこで、それらに共通する話根をとり出してみたい。

1、住む世界の異なる男女の再会
2、女の姿を「見るな」という禁忌の存在
3、男のかいま見（禁忌背反）
4、女が見られたことに気づく
5、離別

右からもわかるように、ここでのかいま見は「見るな」という禁忌の存在に対応している。そして、その禁忌を犯すことによって、「見ること」が離別に直接につながっているのである。再会できたにもかかわらず、異類であるという正体を見られることにより、女が去らねばならなくなる。すなわち、再会――離別という構造の中で、かいま見が離別を必然化させる要因として存在する。かいま見が一つの伝承を終結させる機能を有しているのである。

もう一つ、神話の中に見られるかいま見として『風土記』の中にある白鳥処女伝承のものが考えられる。これも同様に話型を考えてみたい。

1、女が天から降りてくる
2、男がそれをひそかにのぞく
3、男が女を愛づる心をおこす
4、結婚
5、女が天へ帰る

これは、型の上からいえば、1と5の、天女が地上に降りてきて、再び帰っていくという構造の中に、2・3・4の、かいま見による婚姻が形成されているといえる。しかしながら、ここでの「見ること」は、単に二人を出会わせ男の心を動かして結婚へと導く契機になっているだけではない。それが羽衣を盗みとる行為に連なる故に、その延長線上に、逆の羽衣を発見されることをも含んでいる。すなわち、かいま見が、出会いと別れという、相反する事柄を機能させる性質を有することになる。それは、別の言い方をすれば、他界の女が地上での生活を経て後去るには、かいま見が必要であったということである。

物語において最も典型的なのは、今みた白鳥処女伝承型の1・5が欠落したようなものであろう。

1　男が女をかいま見する
2　男が女に心を動かす
3　出会い（婚姻）

以上のように整理できると思われるが、物語ではかいま見が話の発端となるというのが特徴である。「見ること」が女を懸想させることになり、いわゆる「色好みの物語」が形成される。しかしながら、それはよくいわれるように必ずしもめでたしめでたしで終わるとはかぎっていない。つまり、かいま見を呪福獲得のための契機と見ることは必ずしも物語の方法として認められない。むしろ、かいま見によって結ばれた男女の離別が結果としてもたらされるということもみておかなくてはならないのではないか。

ともあれここに神話から物語への話型の変化を認めることはできよう。その原因を、篠原義彦氏は、

……記紀の世界では不可思議さの実体が殆んど「醜」であったし、それ以後の物語の世界では多くは「美」であったし、しかもその「美」は非現実的・超人的なものから現実的なものへと写実化の道を歩んでいる。[5]

と、客体の「醜」から「美」への変化、あるいは現実化に起因するとされている。客体の変化によるとされるのは林田孝和氏も同様である。

『記紀』所伝の覗き見による離別を語るモチーフが、物語文学の世界で恋愛・結婚譚へと移行してゆくのは、その客体の変容に起因する。対象が神話的・民話的なメルヘンの世界のものから、生身の人間へと変容したとき、覗き見が結婚の契機として語られる垣間見の文芸が発生したのである。羽衣を媒体として天人と人間との資性を兼有する処女の、垣間見られることによる結婚、そして離別を語る白鳥処女型の説話群は、その生成の軌跡を端的にみせている。[6]

両氏が述べておられる客体の変化ということは、もちろん認められる。しかし、客体の変化がもたらされるのは何故か。また、かいま見の原型を『記紀』として、『記紀』から『風土記』へ、『風土記』から物語へと直線的に考えるのが妥当かどうかという点で問題があるように思える。

そこで少し視点をかえて『記紀』と『風土記』のかいま見に共通している点はないかということを考えてみたい。共通しているのは両方ともかいま見を媒介として、こちらの現実世界とあちらの他界との緊張関係が存在するということである。他界とこちらの世界とが接触するとき、その接点には必ず何らかの禁忌が存在しているが、その禁忌を犯すのがかいま見という行為となっている。『記紀』においての禁忌は「見るな」であったし、『風土記』では羽衣という呪具の存在ともかかわるが、「見ら（とら）れてはならない」というものであったと考えられる。しかも、いずれにしても、その禁忌は破られるために設定されたといえなくもない。[7] また、こうした禁忌の存在が述べられるのは、それらの多くが始祖伝承であるためでもあろう。つまり、それが始祖を語る伝承である故にその聖性を強調する必要があるのである。すなわち、禁忌を伴うことによって、あちらの存在としての聖性が保証される。したがって、禁忌のうちにある限り、それは聖なる他界の存在にとどまる。禁忌背反という行為をもってはじめてこちらの人間にとっての始祖となりうるのである。始祖伝承における禁忌は破られるべくして設定されたところにこそ本質的な意味が認められよう。そして『記紀』の場合は、その反禁忌の行為が婚姻しているものたちの離別につながっていく。『風土記』の場合にも、反禁忌の代償としてまずは地上での暮らし＝婚姻が語られるが、最終的には、天上への回帰＝離別ということにおいて同様の結果がもたらされる。

『記紀』と『風土記』のそこでの違いは、伝承そのものの視点のおき方の違いによると考えられる。もちろん、記紀神話と風土記神話そのものの違いについても考察せねばならないのだが、このかいま見にかかわる伝承に関していえば、他界とのかかわりのほうに主眼がおかれているか、あるいはかいま見の主体のほうに目が向けられているかということである。『記紀』の場合は、他界の人間とどのようにかかわり、禁忌を犯すことでどうなったかということが中心であるのに対して、『風土記』のほうは、かいま見が人間界からの視点でなされ、しかもかいま見するという禁忌背反の行為そのものよりも、かいま見の後の展開に目が向けられている。つまり、かいま見の主体である人間のほうに重点がおかれているといえるのではあるまいか。その意味において『風土記』のほうが、より物語的である。物語の話型が、前述の1・2・3の型になるのも、他界とのかかわりを述べた部分が欠落し、いわば人間の世界により関心が向けられた結果であると構造の上からはいえそうである。

3

『伊勢物語』が、どうして「ふるさと」でのかいま見ではじまらなければならなかったのであろうか。もちろん、一代記の最初の部分で「初冠」という通過儀礼とかいま見――いちはやきみやび――がかかわってくるのは当然のことであろう。しかし、なぜそれが「ふるさと」でなければならないのか、しかも、かいま見られるのがどうして「女はらから」なのか。それは『伊勢物語』だけの方法の問題にとどまらない。

『源氏物語』の若紫巻の北山でのかいま見が、『伊勢物語』の初段の強い影響を受けているということはすでに定説視されている。かいま見のあり方や「紫」とのかかわりなどであるが、そこで、それらと、さらに『源氏物語』の他のかいま見とゆかりのかかわっている場面をあげて比べてみたいと思う。

（伊勢物語初段）
①初冠のをとこ
②いとなまめいたる女はらから
③平城京　春日の里（ふるさと）
④狩衣姿

（若紫）
①わらは病の光源氏
②紫上（→藤壺）（尼君）
③北山

④いたうやつれ給へど……

（橋姫）
①薫
②大君・中君
③宇治
④やつれておはしけり

（宿木）
①薫
②浮舟（→大君）
③宇治（常陸）
④忍びやつれたる

①はかいま見の主体、②は客体である。③はかいま見の場、というよりかいま見される女の属している空間といったほうがよいかもしれない。そして、④はそのときの男の様子である。

まず、すべてに共通しているのは、④のかいま見の主体である男の様子が「やつし姿」であるということである。これは『伊勢物語』の初段が「初冠」であることや、光源氏がわらは病であるということもかかわるが[8]、かいま見が婚姻と結びつくところから、かいま見には通過儀礼の要素が含まれていると考えられる。

また、ここでとくに注目したいのは、かいま見されるゆかりの女性が、すべて他界とのつながりにおいて描かれているということである。「ふるさと」や「宇治」のもつ異郷的なイメージについてはすでに指摘されている[9]ので省きたいが、「北山」については、「聖地」として、物語の中でも

三月のつごもりなれば、京の花ざかりは、みな過ぎにけり。山の桜は、まださかりにて……

と京の周縁的な土地として京との時間の流れの違いが述べられている。それについて、森岡常夫氏は次のように述べておられる。

そこはかぐや姫の去った月の世界の如く超現実的なものではなく、人間の至り得る境であるが、しかし決して現実的世俗的なものではなく、精神の傾向としてはやはりかぐや姫の原郷と同じく浪漫的である。従って紫上は、この世ならぬ世界に見出だされて、やがて現実に引き出されたのであるから、天上に舞い上がったかぐや姫とは逆である。北山において若紫が見出だされたところには、

かような意義が存する。[10]

さきほど、なぜ「ふるさと」なのかと書いたが、ゆかりが他界の女であり、そのゆかりがかいま見されるということは、とりもなおさず、そのかいま見が神話性・古代性を孕んでいるということではあるまいか。他界の女がかいま見られたことによって「現実」にひき出され、こちらの男と結婚する。こちらの世界での話が展開されようとしているのである。

他界の女がこちらの世界と交渉をもった場合、それは常に他界への回帰性を孕んでいる。しかし、同じく他界の女でありながら、かぐや姫は月へ帰り、紫上は地上に残る。それはなぜであろうか。それは、紫上がかいま見によって発見され、しかもゆかりであるためではなかろうか。すなわち、ゆかりであるということは、かいま見による二重の機能——地上への滞溜と天上への回帰——が、ゆかりとゆかりの本体とそれぞれに課せられているということではないか。地上性と天上性が分担されているということではないか。

ゆかりであるということは、ある人間がある人間の形代たりうることの一つの保証であろう。かいま見と形代とのかかわりは、前述のトヨタマヒメの出産にまつわる話の中に見られる。トヨタマヒメがかいま見されたことによって他界へ去ったあと、残された子ウガヤフキアヘズノ命を育てるために妹のタマヨリヒメが訪れる。始祖を語る男の系譜に対して、それ自体、副次的なものとして語られる形代の系譜は、こうして出発当初から女であることが決められているが、かいま見によってもたらされる離別を逆転させるために形代は用意されたといえる。つまり、かいま見という反禁忌が離別を招き、その離別を反離別へと転換させるために形代が必要とされた。その意味で形代とは地上的な存在だといえる。

しかし、神話の中では、なぜタマヨリヒメが形代たりうるのかということは描かれない。むしろ、描く必要がないのかもしれないが、それを「ゆかり」という形で必然化させているのが『源氏物語』であろう。『源氏物語』の中では、ゆかりは似ていること、つまり面影の通うことによって支えられている。[11] そこに、ゆかりが「かいま見られること」の物語内的な必然性が存在する。「見ること」によって「ゆかり」であることが見あらわされる。それ故に、ゆかりをかいま見することはゆかりの系譜を保証するためだともいえる。「竹河」巻のかいま見は、姉妹であるという点では「橋姫」巻と類似しているが、日常的時空におけるできごとであり、しかも、かいま見の主体である蔵人少将にとって、

をとこは、更に、しか、思ひ移るべくもあらず。ほのかに見たて

まつりて後は、面影に恋しう、「いかならんをりに」とのみ、思ゆるに……

（竹河）

と、かえって中君が大君の形代たりえず、大君への思慕を強める結果にしかならなかった。本来、ゆかりたるべき人物がゆかりでありえなくなっている状況がかいま見によって、ここに提示されているということについても考えてみなくてはならないが、かいま見の存在の意味も変容しているといえる。

「ゆかりの論理」といわれるものは、物語的な部分に属すものだといえよう。しかし、ゆかり自体はその基層において古代性を孕んでいる。地上性と天上性を背負った他界の女を、物語の時空の中に登場させるとき、必然的に選びとられたのが神話的なかいま見であったと考えられるのではないか。逆にいえば、ゆかりの登場はかいま見を通してでしかありえないのではなかったか。

① 今井源衛「古代小説創作上の一手法」『国語と国文学』昭和23年3月
篠原義彦「源氏物語に至る覗見の系譜」『文学・語学』昭和48年8月
林田孝和「垣間見の文芸」『源氏物語の発想』
② 乗岡憲正「季節文学の発生序説」『物語文学の伝承基盤』
③ 藤井貞和「末摘花巻の方法」『講座源氏物語の世界』第二集
④ 「豊玉姫神話と黄泉国神話」『国語と国文学』昭和51年5月
⑤ 篠原前掲論文
⑥ 林田前掲論文
⑦ 西郷信綱氏が『古事記注釈』第一巻で同様のことを述べておられる。
⑧ 「わらは」が「童」に通じているということは、すでに三谷邦明氏が「藤壺事件の表現構造」『今井卓爾博士古稀記念　物語・日記文学とその周辺』の中で述べておられる。
⑨ 「ふるさと」の異郷性については広川勝美編「物語の形成」『神話・禁忌・漂泊』、宇治については、広川勝美「源氏物語　宇治時空試論」『日本文学』昭和50年11月、高橋亨「宇治物語時空論」『国語と国文学』昭和49年12月などがある。
⑩ 「紫上論」『平安朝物語の研究』
⑪ 広田収「反神話から非神話への転換」『源氏物語の表現と構造』